

アルカディアの望遠鏡

—ドナート・クレティの《天体観測》をめぐる新しい提案

高橋健一 (和歌山大学)

ヴァチカン絵画館のドナート・クレティの八枚の絵は、野山で天体観測に勤しむ人びとを表わすもので、この「ボローニャのウァトー」の代表作として以上に、科学と芸術の交差の証として頻りに紹介される。本来連作をなすこの小品には、天文学者で詩人のエウスタキオ・マンフレディが図像プログラムを提供した。作品の準備中の1711年8月30日にマンフレディが教皇クレメンス11世の将軍ルイーゼ・フェルディナンド・マルシーリに宛てた手紙では、望遠鏡のモデルや星の種類などが画家に指定されたと報告される。

発表の前半では、絵の初期の来歴が再構成される。マルシーリの1711年8月1日付の手紙の写し(Archivio di Stato, Bologna, *Ambasciata bolognese a Roma, Lettere del Senato all'Oratore*, 270)が、目下最良だと思われる提案に役立つ。未公刊のその文書によれば、連作はマルシーリ将軍が「教皇聖下のお楽しみに奉仕する品として」マンフレディに命じて用意させた。また同じ史料によれば、絵はクレメンス11世本人が所望し、教皇はその手本と設置場所(「風の塔」)を指定したという。「科学研究所」の設立をボローニャ元老院に促していた当時のマルシーリは、クレメンス11世に計画の支援を求めている。従来の論者は、問題の作品を、当の研究所の天文台の実現のために教皇に贈られた賄賂と推測している。新たな叙述を試みたい。

そして後半では、図像の構造や機能、思想史上の意義が考察される。その天体(細密画家ライモンド・マンツィーニに委嘱された)が周りの風景と次元を異にし、望遠鏡を通して見られた状態を表わすことはすでに指摘された。だがこの仕組みが幻視絵画のものと類似の効果を生ませることは、いまだ認識されていない。鑑賞者はレンズ上の映像を画面の人物と共有し、自らをその誰かと重ね合わせる。クレメンス11世もこれと同じ体験をしたと、素描にも注目して主張したい。

クレティの望遠鏡は、教皇を自然の中で働く若い学者らの間に引き連れた。既成の価値を覆すその驚異の装置の着想は、バロックの伝統に負う。しかしここで教皇は、不安や怒りでなく充足感や安心を覚えると想定されている。ピエル・ヤコポ・マルテッロらの同時代文学との比較により、「バロックの終焉」の趣味を示すこの図像の性格を明確にしたい。クレメンス11世はマンフレディと共に文学アカデミー「アルカディア」に属した。彼の言動が、会員を等しく牧人とみなす同アカデミーの理念と親和的だと評価された事実に触れたい。それは絵の成立条件を説明する。マンフレディは先の手紙で、イタリアの地理学を改革するため自らイタリアの土地を旅して星を観測する意志を、脱俗の憧れを滲ませて伝えている。連作をそれ自体「アルカディア」的なこの文面との関連で読み直したい。